2023．3．5
くっちゃん景観まちづくりシンポジウム

講演

「人と景観とのかかわり」

～四季を奏でるふるさとの風景～

自然公園指導員　矢吹俊男

- 自己紹介
- 名前　矢吹俊男
- 出身地:福島県福島市
- 出身高校:学校法人福島工業高等学校
- 出身大学:明治大学

お話の流れ

☆景観とは

☆土地の成り立ち

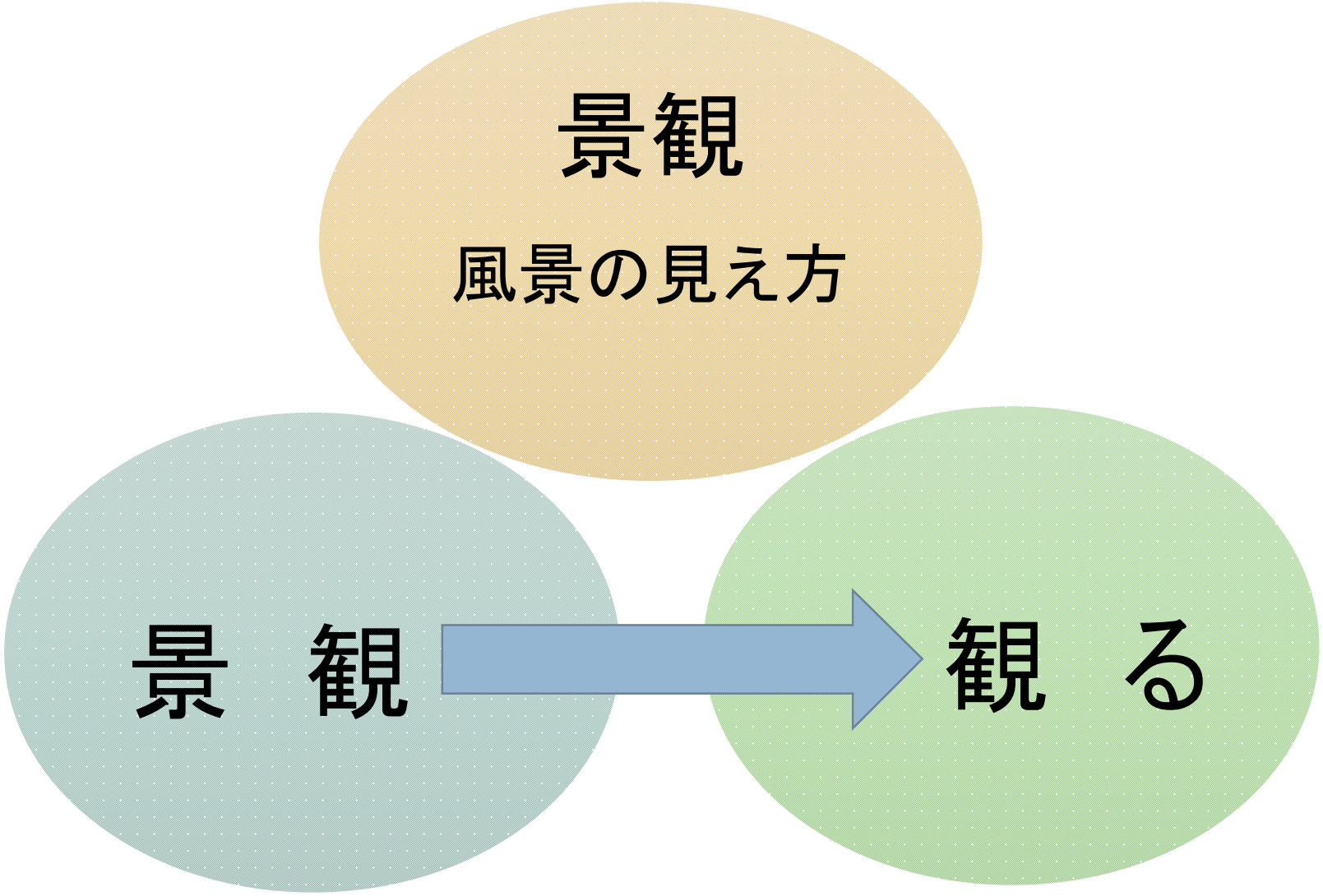
☆植物景観

　　ー桑原義晴先生が伝えたこと－

☆資源としての風景

景観とは？

人が見ること・見えていること



火山がつくった景観

景　観

モノではなく現象

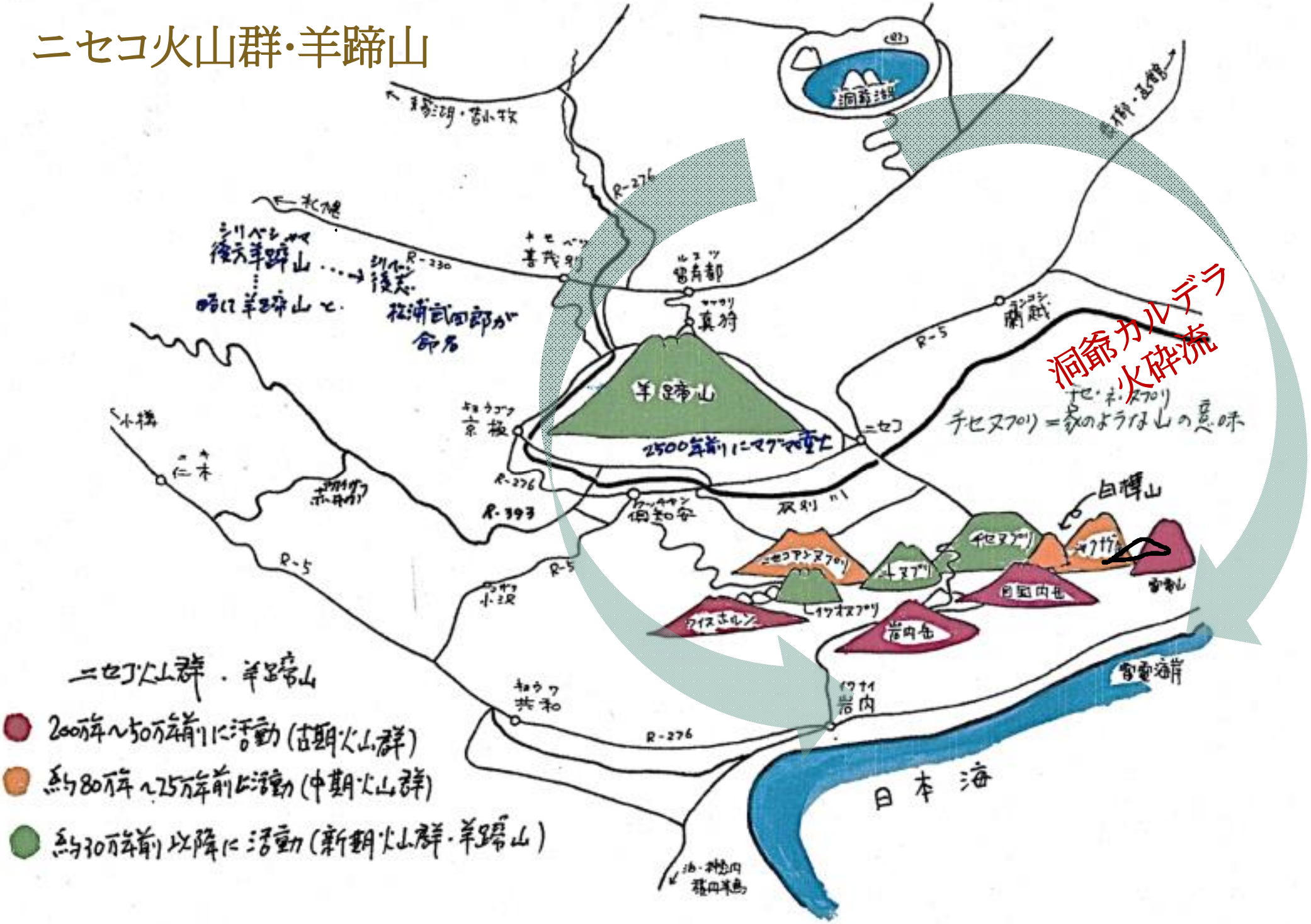
良い景観とは

心をひらく誘いがある

見る人の心に残る

心に刻み込まれる

ニセコ火山群・羊蹄山


洞爺カルデラ
火砕流
羊蹄山
2500年前にマグマ噴出
ニセコ
チセヌプリ＝家のような山の意味
真狩
留寿都
倶知安
京極
共和
岩内
日本海
白樺山
ニセコ火山群・羊蹄山
200万年～50万年前に活動（古期火山群）
約80万年～25万年前に活動（中期火山群）
約30万年前以降に活動（新期火山群・羊蹄山）

2万年前の日本列島

約18000年前この土地に人間と
大型の動物たちが共存していた

小学校社会科教科書に見る縄文ムラの景観

北小金貝塚（伊達市）

山陰移住会社（明治時代）

倶知安駅から眺める駅前通り（大正時代）

冬の風景:北7条付近

藤田旅館
ジュピター
抑銀
39-73

歓迎
平成元年
はまな
食事処
あんどう
パチンコ

植物景観
ー桑原義晴先生が伝えたことー

　人間と自然界とは相互的な関係にあるので、自然界から隔離すると、生命も即座に断絶されてしまう。これほど人間は自然界からた偉大な恩恵（作用）を受けているが、人間もまた、自らの生活の結果として自然界に様々な影響（逆作用）を及ぼしている。この作用を最小限に食い止め、自然を大切にすることが自然保護の真義ではないか。

陽来復、山麓にも春がようやく訪れ、暖かい日差しがさんさんと照り輝き、雪解けが日増しに進んで、新しい土の香りがあたりに漂っています。

桑原義晴「ニセコ植物誌」

逸早く湿原を彩る季節の使者

羊蹄山山麓の火口湖「半月湖」周辺には、アオトドマツやエゾマツのほか、ミズナラ、ハルニレ、シナノキなどの樹木がうっそうと繁茂し、見事な「針広混交林」を形成しています。

桑原義晴「羊蹄山植物誌」

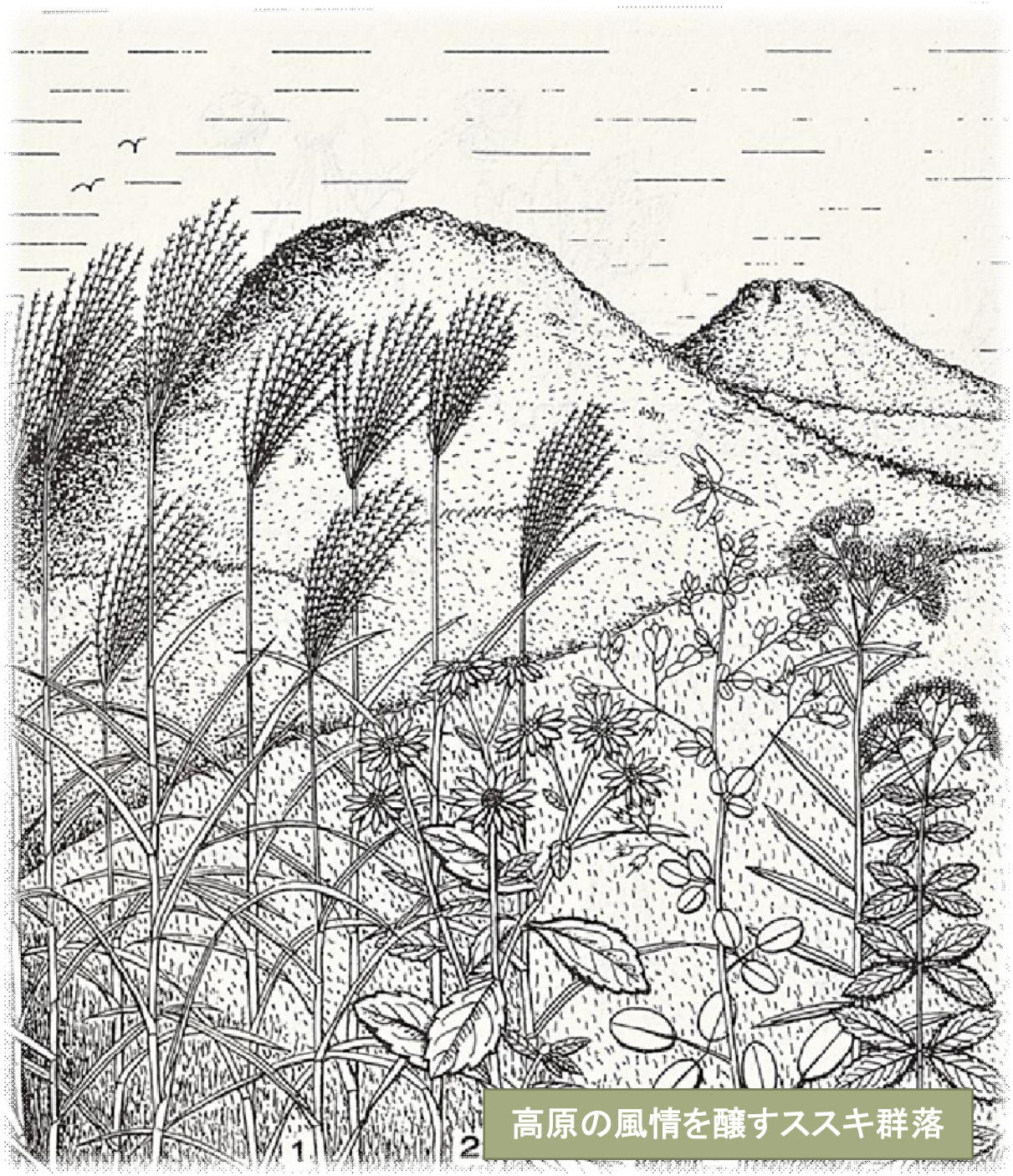
半月湖畔の森林景観（林相）

日差しがしだいに西に傾いて、気温が日ごとに下がるにつれ、秋草の花が野山を飾るようになります。

とりわけ、ススキは秋の風物詩で、7～8月にかけて、一斉に銀色に淡く輝く穂をなびかせます。

アカトンボの飛びしきる澄み切った青空のもと、さわやかな秋風に穂の波打つ様は、高原の眺望に一層の風情を添えます。

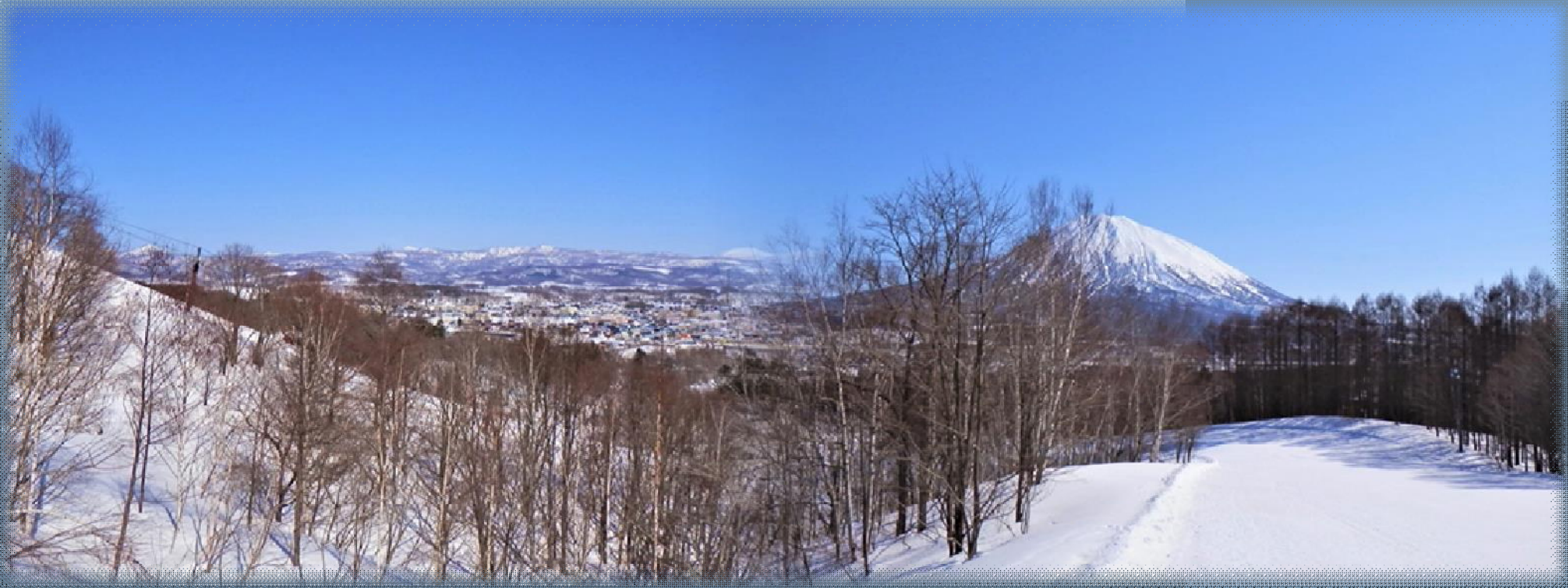
桑原義晴「ニセコ植物誌」



高原の風情を醸すススキ群落

羊蹄山は、春先は残雪の描く鹿の子まだらの絣（かすり）の衣装に、真夏は樹木の重厚な葉に飾られた品格のある晴れ着に、また、仲秋は赤・黄・褐色と、色とりどりに織りなしたもみじの錦に、さらに、真冬はまばゆいばかりの白装束（夕日に映えると、ことのほか壮麗です）に、それぞれの季節に応じて衣替えをしますので、四季を通じて美しく眺められる北海道の名山です。

私たちは、この景観的にも優れ、学術的にも貴重な山を自然界からの無二の贈り物として、人手を加えることなく、無傷のまま後世まで守り続けたいと思います。　（桑原義晴「羊蹄山植物誌」「天然記念物と文化財」より）



景観資源

自然系景観

心 象 系

都市系景観

歴史・文化系

自然系景観

森　林
山　岳
海　浜

心象系景観

まつり
校　歌

都市系景観

駅周辺
市街地

歴史文化系景観

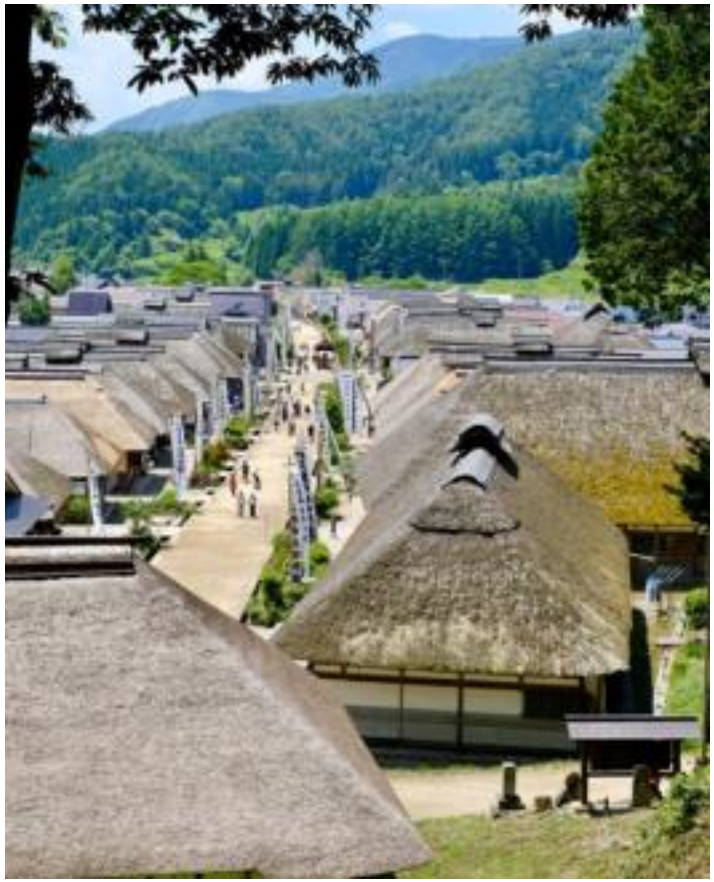
歴史的建造物
歴史的街並み

観光 → 土地の光

土地の光＝自然と人間の世界が入り混じっている姿

土地の財モノ

景観を観る → 自然と人間の生活文化

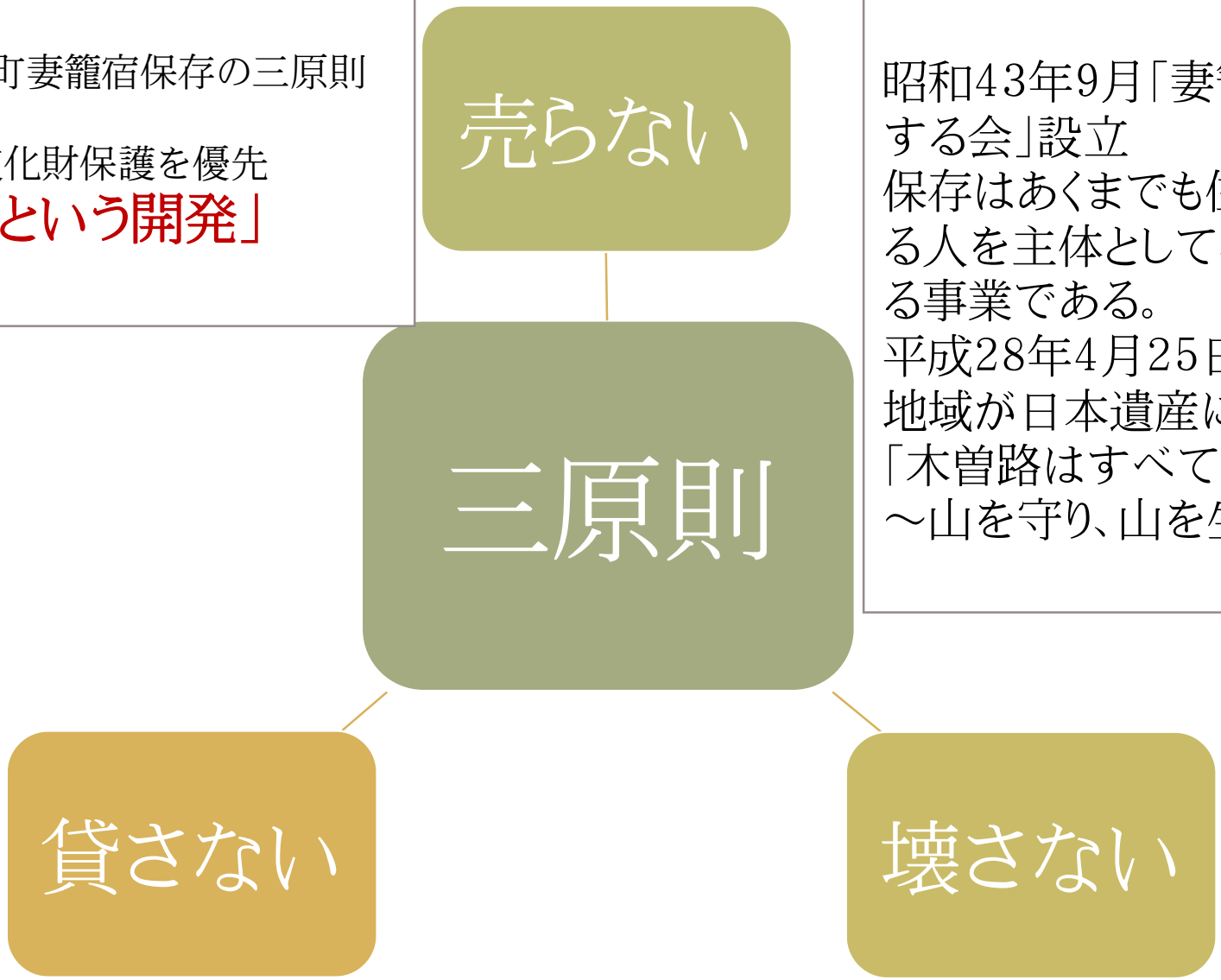


福島県南会津郡下郷町大内

参　考

長野県南木曾町妻籠宿保存の三原則

自然と文化財保護を優先
「保存という開発」



昭和43年9月「妻籠を愛する会」設立
保存はあくまでも住んでいる人を主体として行われる事業である。
平成28年4月25日、木曾地域が日本遺産に登録
「木曽路はすべて山の中
～山を守り、山を生きる」

文化遺産に関する課題

長野県南木曽（なぎそ）町の妻籠宿では、家の改築や補修には協会の許可が必要ということを守り続けています。しかしながら、住人の高齢化による家屋の維持や空き家の存在などの課題が生じています。

妻籠宿だけの課題ではありません。各地に現実的に存在する、少子高齢化や人口流出による地方の過疎化、限界集落などの課題は、文化遺産消滅につながってしまうかもしれません。

歴史的経緯、地域の風土に根差した世代を超えて受け継がれている伝承や風習などを踏まえたストーリーのもとに、有形・無形の文化財をパッケージ化し、活用を図る中で情報発信や人材の育成、そして伝承などの環境整備などの取組を効果的に進めていくべきではないでしょうか。

文化遺産を生かした地域再生の道筋をつけることが必要ではないかと考えます。

倶知安町は今のままで良いのか？

実際に街を歩いてみて思ったこと

・道がガタガタ
・ゴミが落ちている
・道がツルツル
・歩道が狭い
・活気がない
・使われていない建物が多い

・山がきれい
・川がきれい
・農産業が盛ん
・動物が多い
・ジャガイモの花

理想の未来

＊誰もが住みやすく楽しめるまちにしたい

倶知安中学校「総合的な学習の時間」のまとめより抜粋

古い時代の駅前通りの町並みはなんとはなく統一されていたような雰囲気でした。それは、たぶん、意識せず、建物が素材、大きさ、色などが似通ったものでつくられていたいたからではないでしょうか。
それが、時代が新しくなるにしたがって、縛りがないので何でもできてしまった結果、通りは凸凹な建物と素材の違う建物がごちゃ混ぜな状態になってしまったと思います。それ自体を不評とすることはできませんが、これからの街並みを考えるとき、ボリューム（大きさ、高さ）、色、材料を大いに気にしてみませんか。心地よさを皆さんで創出しましょう。

最後までお聞きくださりありがとうございました。